

瓜生堂遺跡における生駒山西麓産弥生土器の占有率

秋山浩三・中川二美・長友朋子・河村恵理

1. はじめにー従前作業成果との関連性ー

生駒山西麓産土器（図421-左）がこれまでの弥生時代研究に果たした役割は大きい。

第一義的には、理化学的な方法を用いなくとも肉眼観察によって容易く峻別できるという、土器胎土における属性がその最も大きな資料上の武器となっている。ここでは詳述しないが、研究の当初段階では、その属性に着目した各地への土器移動・分布の現象整理に有効性を発揮し、それらを基礎に当時の地域間の交流や集団関係の解明への重要な切り口になった。その後、この種胎土を使用する土器類の様式的把握や製作・生産状況、さらには、社会機能論的な位置づけにまでおよぶ議論が繰りひろげられつつある（後掲の諸文献参照）。

なかんずく、三好孝一氏と濱田延充氏の一連の研究が重要である（三好1987、同2001、濱田1990）。両氏は、それまでの地元研究者による蓄積（藤井1968、下村・福永1980、ほか）等をふまえ、該期の土器全体のなかでの生駒山西麓産土器の占有率を検討し、この種の土器群の製作地を究明・限定するのに少なからずの貢献をなした。つまり、土器小様式としても独特な展開をみせる弥生時代中期（主に後半）では、出土土器に占める生駒山西麓産の割合が8割前後ないしそれ以上に達する地域、具体的には東大阪市から柏原市の生駒山西麓域に所在する諸遺跡（北から、植附、西ノ辻、鬼虎川、鬼塚、山畑、段上、水越、恩智、安堂、図420参照）一帯で生駒山西麓産（型）土器が製作されていた事実を解明した。このうち三好氏は、鬼虎川・西ノ辻遺跡、恩智遺跡の重要性を早くから指摘する。しかし、これらの研究は、中期（後半）を中心とした集計データの検討（図421-右）のうえに成り立っており、弥生時代のなかでの時間的一断面のいわば“静的現象”に対する理解に依拠したものといえる。

他方、関連事項としてかつて筆者（秋山）は、各時代における生駒山西麓産土器の各地への搬出状況や土器移動の類型を考察するにあたり、当該地域での在地産胎土土器の製作・生産状況をまず把握することが肝要と考え、作業を実施したことがある。具体的には、縄文時代早期から現代にいたる、この地域での生駒山西麓産胎土を用いる土器類の通時的な

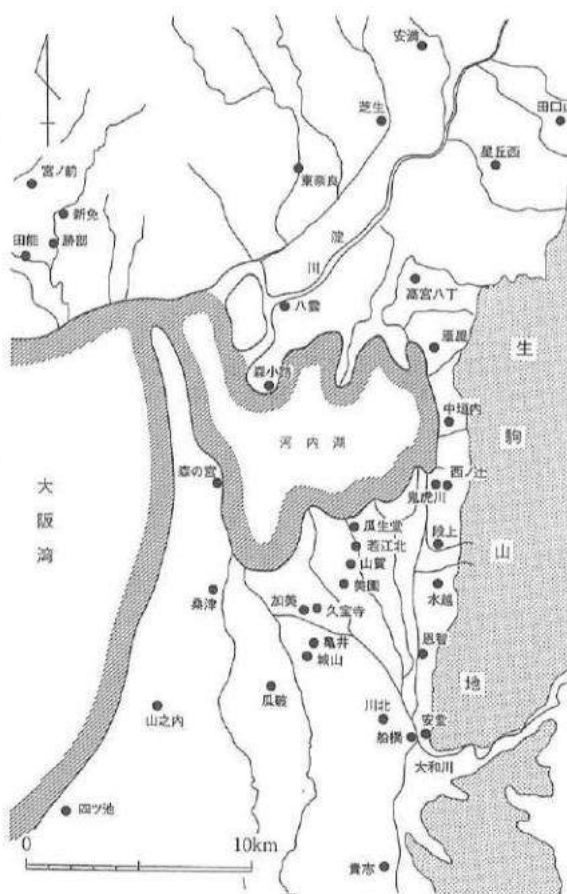


図420 河内湖周辺の主要弥生遺跡

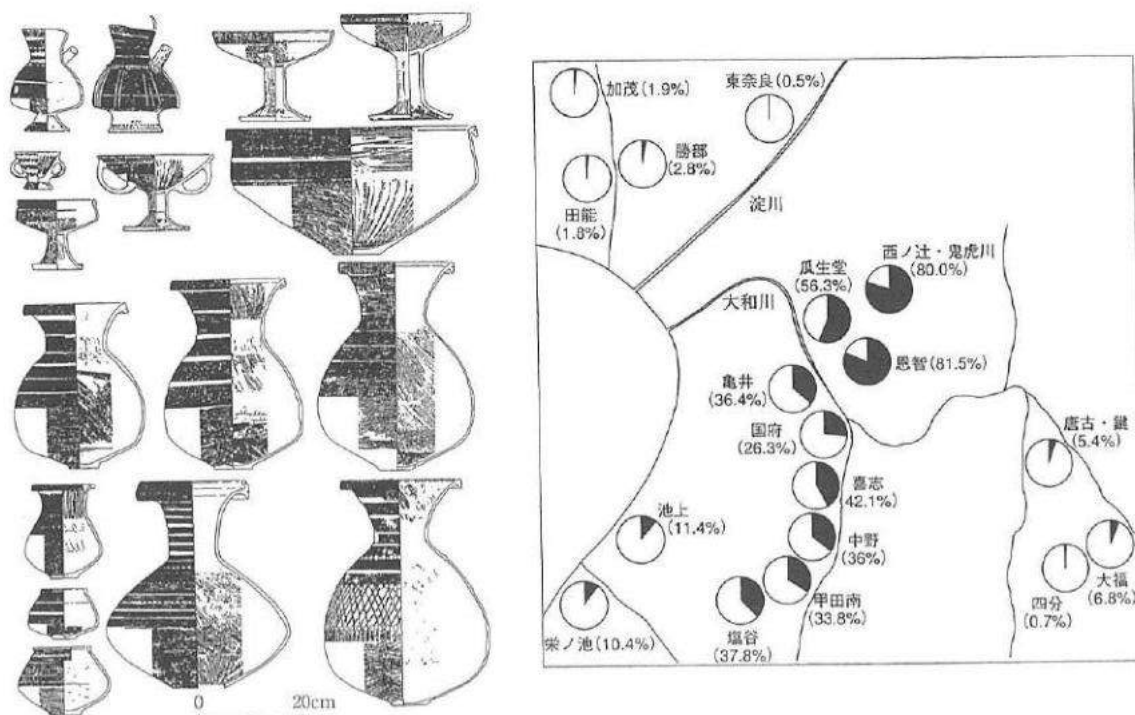


図421 弥生中期の生駒山西麓産土器群と各集落における占有率

占有率を検討し、概略的な叙述を試みた（秋山1986、同1989、同1994）。すなわち、生駒山西麓産土器の製作・生産の画期として、日常土器類を基本的に在地産で賄った第Ⅰ段階（縄文時代～庄内式期）、特定器種だけを在地で生産し他の多器種を他地域産で補った第Ⅱ段階（奈良時代～平安時代中葉）、在地品を全く生産せずにすべて他地域産品を使用する第Ⅲ段階（平安時代後葉～現代）に整理でき、布留式期～古墳時代後半期は第Ⅰ～Ⅱ段階への過渡期ととらえた。また、第Ⅰ段階に属する弥生時代では、時期によっては約1～3割の搬入品をまじえ、それは中期で最も顕著である。しかし、一般的には生駒山西麓産胎土で弥生土器を製作しつづけ、しかも特定器種に偏ることなく、日常的に使用する貯蔵・供膳・煮沸形態土器の全器種を賄ったと評価した。

この現象理解は、基本的には今も大きな変更を必要としない。しかし、当時の作業では、現在ほどには土器資料の蓄積・報告がみられない段階だったので、断片的な個別データを援用したやや粗っぽい素描であった事実は否めない。

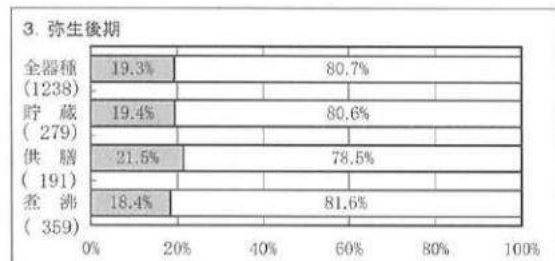
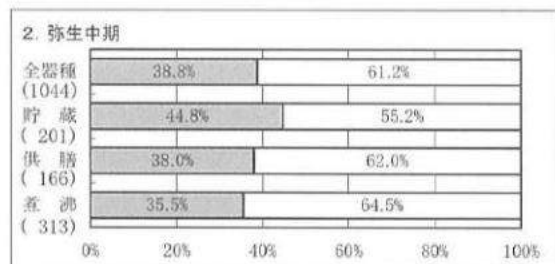
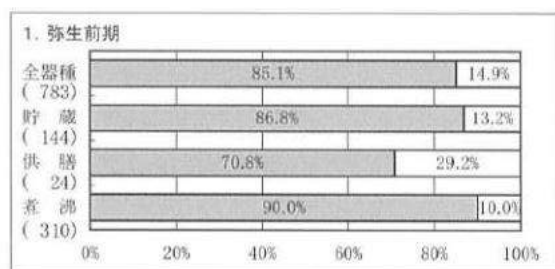
そこで筆者らは近年、ここ15年以上の間に加速度的ともいえる状況で生駒山西麓地域で蓄積がみられた弥生土器資料を中心にして、当該地における生駒山西麓（在地）産占有率の時期ごとの検討をあらためて試みた。加えて、他地域における土器搬入割合に関するデータとの比較を実施し、弥生時代における土器類移動の実態をめぐって若干の考察をおこなった（秋山・瀬川・中川2002、秋山・朝田・中川・池谷2002、以下、先稿と記載）。これら先稿での成果内容については後項でもふれる予定だが、今回の瓜生堂遺跡の発掘調査では、大略的には弥生時代各期の多くの土器資料が得られたことでもあるので、先稿成果との資料対比に好条件を備えている。また、本遺跡は、生駒山西麓地域に近接する沖積地・河内平野に立地し、しかも当地域を代表する弥生時代の拠点集落でもある点からも、対比材料としては好資料と判断できた。そこで本稿では、先稿での実践内容と同様な手法で検討を加えてみることにした。

2. 資料内容と集計・算出方法

集計資料は、瓜生堂遺跡の1999年度および2001年度の各調査区で出土した弥生土器片の全点を対象とした。2002年度調査区に関しては、弥生土器の出土がほとんどみられなかったため除外している。

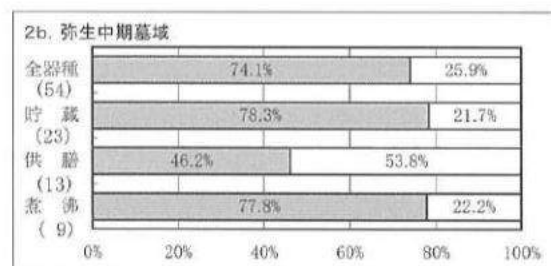
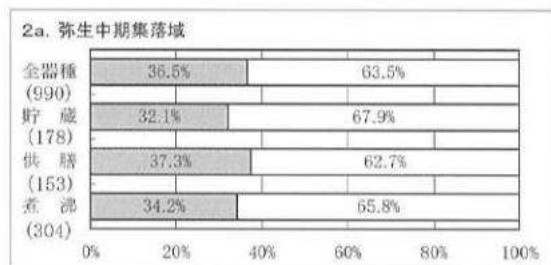
各資料の詳細時期について再述しておく、前期は前半新相段階がほとんどで若干の新しい土器をまじえ、中期は後半段階が中心で中葉段階をごく一部含み、後期は弥生後期前葉～庄内式期段階の幅をもつが大部分は後期前葉段階に比定できる土器となる。しかし、各期とも主体となる時期以外の個体数がきわめて僅少なので、集計算出値には大きくは影響をおよぼさないと判断できる。したがって、今回の各期の対比資料は、前期前半（新相）、中期後半、後期前葉の土器群となる。また、出土状況では基本的に、前期では集落域、中期では集落域と墓域、後期では性格不明の集石遺構ほか、である。中期では、極端に遺構様相が異なる二者で構成され、しかも、両者域が明瞭に空間的分別できるので、集落域と墓域に区分した集計も別途おこなった。

集計・算出基準は、基本的に先稿の方法を踏襲した。つまり、3機能器種別ごとの集計に関しては、原則的に貯蔵器種は壺類、供膳器種は高杯・鉢類、煮沸器種は甕類として分類し、うち、口径が34cmをこえる大形甕については、秋山1991・2004で根拠を示したように貯蔵器種に含めた。なお、本書本文編でも述べたように、前期の如意形（外反）口縁鉢については、口縁端付近の小片では甕との峻別が困難な個体が多いので、それらは一括して甕に含めている。



トーン：生駒山西麓産、() 内数字：集計個体数

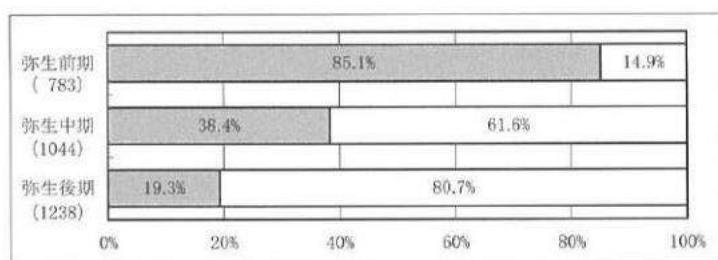
図422 瓜生堂遺跡における生駒山西麓産比率の推移データ1（大別時期）



トーン：生駒山西麓産、() 内数字：集計個体数

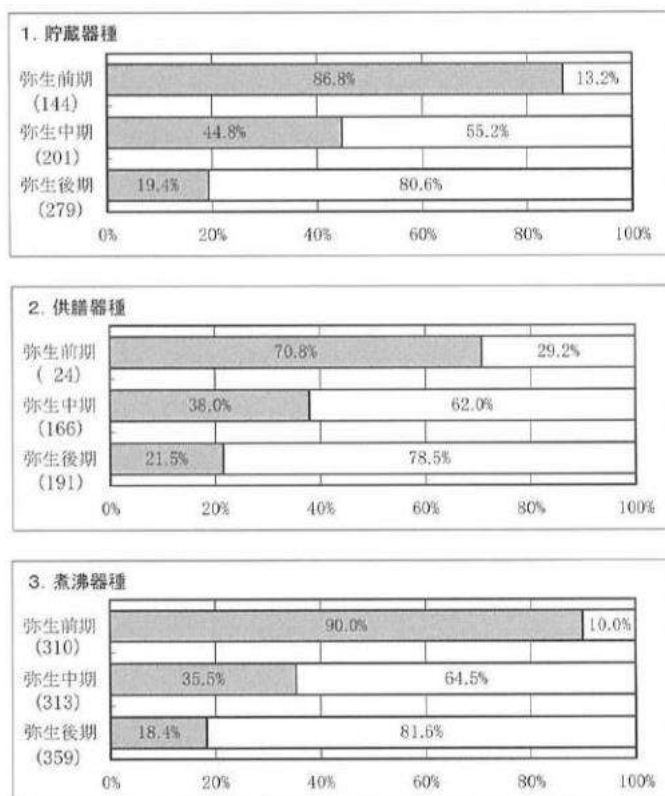
図423 瓜生堂遺跡における生駒山西麓産比率の推移データ2（中期集落域・墓域別）

これらの3機能別集計は、口縁端部遺存の個体でカウントし占有率を算出した。また、全器種とした個体数では、それらに端部が遺存する蓋・脚、底部等を加算して作業をおこなっている。この算出方法によったため、データ上では、3機能器種の総計数と全器種数とは合致していない。さらに、今回の資料提示値は、個体識別をおおむね実施したうえでの算出結果である。よって、資料的には個体数として置き換えてよい集計データとなっている。なお、今回の検討では、個体識別を一応経た体部片を含めた集計、さらには、破片点数に基づく集計を、各調査区の遺構面や遺構ごとに実施した作業もおこない記録化した。が、それらを逐一紹介するのは煩瑣になると判断し、具体的な算出値やグラフ化資料の提示はひかえた。



トーン：生駒山西麓産、() 内数字：集計個体数

図424 瓜生堂遺跡における生駒山西麓産比率の消長—1（全器種別）



トーン：生駒山西麓産、() 内数字：集計個体数

図425 瓜生堂遺跡における生駒山西麓産比率の消長—2（機能別）

3. 生駒山西麓産比率の様相

以下では、算出結果をみていこう。

図422には、時期別に全器種、貯蔵、供膳、煮沸の順で生駒山西麓産の占有率をグラフ化した。本図をみると、前・中・後期ともに共通する事項として、特定の機能器種だけが高率ということではなく、各器種が万遍なく搬入されているのがわかる。一方、相違点として、各期の占有率が決して近似したものではなく、変化をみせることである。全器種における値では、前期が85.1%、中期が38.4%、後期が19.3%となる。前期では、搬入土器として呼ぶのに躊躇をおぼえるほど突出した割合になっており、中・後期でも比較的高率を示す。なお参考までに付言しておく、今回の中期の占有率は、三好氏の提示データ56.3%（図421-右、三好2001）より低い値になっている。

今回の算出値を、図424では全器種別で時期ごとに、図425では3機能器種別で時期ごとに配列グラフ化したものであるが、上記傾向の各期ごとの変遷が把握しやすいであろう。

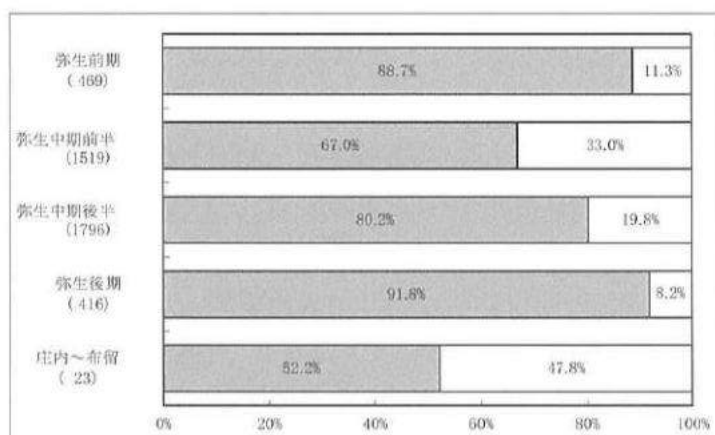
一方、図423は、弥生時代中期における集落域（2a）と墓域（2b）の占有率を別個にグラフ化したものにあたる。資料母数の少ないデータを一応

捨象するなら、ここでも特定器種において高率を示すことはないようである。しかし、全体（全器種）における占有率では、生駒山西麓産土器が集落域で36.5%、墓域で74.1%となり、出土遺構の性格のちがいで、倍以上の大きな数値差となる。このことは、集落域に比べて、墓域からの出土土器（そのほとんどが方形周溝墓群の供献土器）において、生駒山西麓産土器が明らかに意図的に選定され用いられたことを示す。

以上のように、瓜生堂遺跡内の近接調査区における生駒山西麓産土器の占有率は、時期ごとに変動をみせるいわば“動的現象”を示し、加えて、中期では、集落域と墓域で明確で大きな格差がみられる。

4. 他遺跡との比較をめぐって

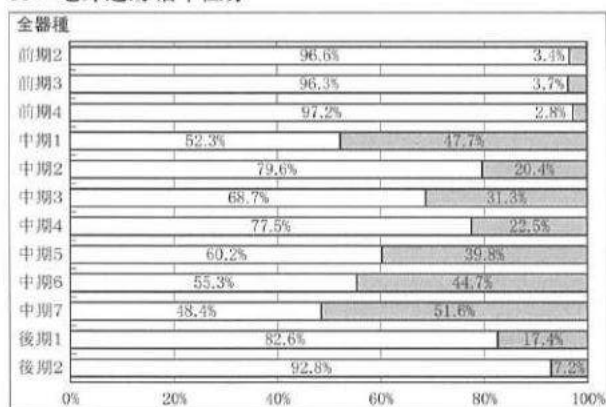
上記の瓜生堂遺跡における生駒山西麓産土器の集計データを他遺跡での様相と比較し、若干のコメントを付しておくことにする。



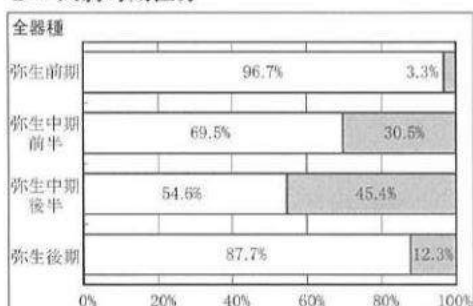
トーン：生駒山西麓産、() 内数字：集計個体数

(1) 河内湖東岸部遺跡群（鬼虎川・西ノ辻・水走・植附・神並）

A：亀井遺跡編年区分



B：大別時期区分



トーン：生駒山西麓産(搬入品)

(2) 亀井遺跡

図426 他遺跡における生駒山西麓産比率の消長（全器種別）

図426は、頭書に述べた経緯で集計した生駒山西麓産土器の占有率データである（秋山・朝田・中川・池谷2002）。まず本図に基づいて簡単に解説しておこう。

(1)は、同土器群の製作地域と考えてよい河内湖東岸部遺跡群（鬼虎川・西ノ辻・鬼塚・水走・植附・神並遺跡）での集計結果にあたる。この遺跡群は、瓜生堂遺跡の東北東約4kmの生駒山西麓扇状地に位置する。当地での在地産品である生駒山西麓産土器は、その消長を大別時期ごとに示すと、全器種内での占有率は、前期88.7%、中期前半67.0%、中期後半80.2%、後期91.8%となり、変遷史的にみて決して平板的なあり方ではない事実を示し、また、機能器種別でも、これらの数値におおむね呼応するあり方をみせる。そして、この地域では、生駒山西麓産という在地土器が明確に峻別できることの効用として、他地域から搬入されてきた土器類の量的変遷を理解することができる。その視点で土器搬入現象の頻度をみると、大局的様相として、前期と後期では低く中期では高いという変遷を示す。要するに、各地から河内湖東岸部遺跡群へ持ち込まれてきた動態を、これらのデータは遺憾なく伝えている。

(2)は、亀井遺跡における生駒山西麓産の占有率を再整理したものである。同遺跡は、瓜生堂遺跡の南南西約5kmの沖積地・河内平野部に位置する。この遺跡では、生駒山西麓産は搬入土器に相当するが、中期では搬入率が高く、前期と後期では低い。この大局的な傾向は、(1)でみられた土器搬入現象の様相と近似かつ相応している。

以上のデータから、河内地域における土器の移動現象は、大別时期的な動態として、中期段階において盛んで、それに比べ前期と後期では相対的に頻度が低かったことがわかる。

これらの数値のあり方と、今回の瓜生堂遺跡の様相とを比較してみよう。中期と後期における瓜生堂遺跡での様相は、同じ河内平野部の亀井遺跡の状況と比較的類似した比率になっている。しかし、前期段階では、亀井遺跡と瓜生堂遺跡では様相がまったく異なる。生駒山西麓産の比率は、亀井遺跡では3.3%と低率^④であるのに対して、瓜生堂遺跡では85.1%と突出的な高率を示す。この瓜生堂遺跡での割合は、生駒山西麓産土器の製作地である河内湖東岸部遺跡群の占有率に近接しており、河内平野部の遺跡としては異様ともいえる状況となっている。この現象をめぐるのは、本章第1節でもとりあげたように、弥生開始期における生駒山西麓地域の在来・縄文系集団との友好・密接関係性という、この地域ならではの特殊な背景が存在したと考えざるえないであろう。

次に図427は、中期段階の亀井遺跡と城山遺跡における、集落域出土土器と方形周溝墓の供献土器中での生駒山西麓産の割合を、広口壺にかぎって提示された集計結果である（若林1997、同1999）。両遺跡は、亀井遺跡が集落域主体、城山遺跡が墓域主体の同一遺跡群と判断してよいものであるが、ここでの成果

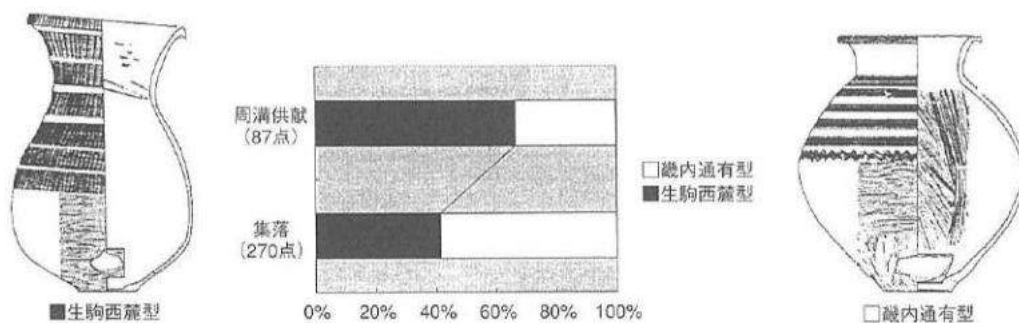


図427 亀井・城山遺跡の弥生中期集落・墓域における広口壺の生駒山西麓産比率

では、生駒山西麓産が集落域で約40%であるの対し供献土器では約70%にも達するという重要な内容が得られている。このように、集落とは大きく異なった高い頻度で、墓域には生駒山西麓産が供されている実態が明確に提示されている。

今回の瓜生堂遺跡における、中期段階の集落域と墓域での生駒山西麓産の占有率のあり方(図423)も、まさにこの傾向と合致していることになる。しかも、本稿での集計では、その様相は、広口壺にかぎった特殊な現象ではなく、貯蔵・供膳・煮沸の各器種にわたって一応に貫徹されている蓋然性が高いといえよう。

5. 結びにかえて

以上、すでに生駒山西麓産土器の割合における時期的変遷が一定程度まで解明されている、①生駒山西麓域の河内湖東岸部遺跡群(鬼虎川・西ノ辻遺跡ほか)と、②河内平野部の亀井遺跡(および城山遺跡)の生駒山西麓産土器の占有率と、両者のほぼ中間に位置する今回の瓜生堂遺跡のデータを比較検討した。

現象面として、同じ平野部の瓜生堂遺跡と亀井遺跡は中期と後期の段階では類似した傾向を示す。また、中期では、集落域と墓域でのあり方も両遺跡はおおむね共通したものである。一方、前期段階では、瓜生堂遺跡はむしろ生駒山西麓域との強い共通性をみせた。この前期における様相差は、弥生開始期の小地域ごとの対応のあり方を反映したものと考えられる(本章第1節参照)。

今後、周辺遺跡での実態を同様な視点でより詳細に検討するならば、弥生土器の移動現象や供給体制からみた、地域社会における動態の具体像がいっそう明確になろう。

〔註〕

亀井遺跡における弥生前期総体としては、今回の瓜生堂遺跡での弥生前期土器より新相の土器を多く含むことが要因で、生駒山西麓産の割合に両遺跡間で差異がでている可能性も考慮しておくべきではある。しかし、瓜生堂遺跡土器とはほぼ同時期から直後期に相当する亀井編年前期2の土器集計(図426-2-A)においても3.4%となっており、本稿での対比結果とその評価に有効性は認められよう。

〔引用・参考文献〕

- 秋山浩三 1986 「河内からもち運ばれた土器」『長岡京古文化論叢』 同朋社
1989 「『河内系』土器について」『京都府弥生土器集成』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
1991 「鶴冠井遺跡における畿内第Ⅱ様式の様相」『向日市埋蔵文化財調査報告書』23 (財)向日市埋蔵文化財センターほか
1994 「ムラ・ムラの交流－河内や近江から弥生土器が移動」『まちと暮らしの京都史』 文理閣
2004 『史跡池上曾根99』(財)大阪府文化財センター(編)
秋山浩三・瀬川貴文・中川二美 2002 「生駒山西麓域における在地産・搬入弥生土器の推移」『大阪文化財研究』23 (財)大阪府文化財センター
秋山浩三・朝田公年・中川二美・池谷 梓 2002 「弥生土器の移動比率－生駒山西麓・河内湖東岸部遺跡群における集計データから－」『立命館大学考古学論集Ⅲ』 立命館大学考古学論集刊行会
佐原 真 1968 「畿内地方」『弥生式土器集成 本編2』 東京堂出版
下村晴文・福永信雄 1980 『もちはこばれた河内の土器』 東大阪市立郷土博物館
菅原正明編 1980 『東山遺跡』 大阪府教育委員会
都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店

- 寺沢 薫・森井貞雄 1989 「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』 木耳社
- 濱田延充 1987 「自然河川出土土器のまとめ」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅳ』 大阪府教育委員会
- 1990 「弥生時代中期におけるいわゆる生駒西麓産土器の製作地」『京都府埋蔵文化財情報』35 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 広瀬和雄 1986 「弥生土器の編年と二、三の問題」『亀井(その2)』 (財)大阪文化財センターほか
- 広瀬和雄・石神幸子・辻本 武・秋山浩三ほか 1986 『亀井(その2)』 (財)大阪文化財センターほか
- 藤井直正 1968 「河内の土器」『河内考古学』2 河内考古学研究会
- 三好孝一 1987 「生駒西麓型土器についての一視点」『花園史学』8 花園大学史学会
- 2001 「手工業生産と集落」『弥生時代の集落』大阪府立弥生文化博物館編 学生社
- 若林邦彦 1997 「中河内弥生中期土器にみる諸相－「生駒西麓型土器」のもつ意味－」『考古学研究』43-4 考古学研究会
- 1999 「贈与交換と弥生時代社会－大阪湾岸部における弥生時代中～後期の社会変化について－」『歴史民俗学』14 歴史民俗学研究会
- (上記以外の生駒山西麓産土器の研究等は、秋山1986、同1989、菅原編1980、若林1997等中の諸文献参照)

【図出典】

図420：濱田1990、図421：三好2001から作成、図422～図425：新規作成、図426：秋山・朝田・中川・池谷2002から作成、図427：若林1997、同1999から作成、(いずれも一部改変を含む)

【謝辞・付記】

本編は、第11回(2003年7月17日)・第12回(2003年8月21日)の瓜生堂(近鉄)勉強会での発表内容に基礎をおいている。当日の検討で、多くのご助言をいただいた各氏にあらためて深謝申しあげたい。本稿作成に関しては、標記4名間で協議のうえ、各時期の生駒山西麓産土器データ集計は各人、その集約は秋山、グラフ化は中川、本文執筆は秋山が分担し、全体的な調整等は秋山がおこなった。

なお、先稿を含めこれまでににおける一連の生駒山西麓産土器の集計結果に基づく評価に関しては、秋山(近刊)「弥生拠点集落における土器搬入の実態」((財)大阪府文化財センター『研究調査報告』第4集)を準備しているのであわせて参照されたい。